

3万尾突破！世界記録を更新！ —ズワイガニの稚ガニ量産の再現に成功—

山本岳男・藤本 宏・山田達哉・高橋庸一
(小浜栽培漁業センター)

【はじめに】

石川県～鳥取県の底曳き網漁業では、ズワイガニは11月～3月の水揚げ金額の60%を占める重要な水産資源である。しかし、日本海の漁獲量は1960年代をピークに三分の一まで減少したことから、資源を回復するため資源管理が行われるとともに、小浜栽培漁業センターでは1984年から資源管理に貢献するためにズワイガニの種苗生産試験に取り組んできた。

これまでの研究開発の結果、昨年度は初めて1万尾を超える稚ガニの量産に成功したことを報告した。本年度の試験では、稚ガニの量産試験を再現し、これまでの飼育技術が本当に確かになったかを検証したところ、生産数は昨年度を上回る3万尾を突破できたので、その結果について報告する。

【成果の内容】

ズワイガニはふ化後2ヶ月間の浮游生活期(ゾエア期とメガロパ期;写真)を経て稚ガニになる。本年度は、まず53万尾のふ化ゾエアを20kL水槽(写真,上)3面に收容して飼育を行い7.4万尾のメガロパを得た。次に、昨年度明らかにしたメガロパの飼育に適した水温(10℃)を実証するため、3～6kLのFRP水槽(写真,中)6面にメガロパを收容し、餌として動物プランクトンのアルテミアとズワイガニのふ化ゾエアを与えて飼育したところ、稚ガニ2.5万尾(出現率34%)が得られた。またこの他に、メガロパの基礎試験を行った41の水槽から約7,000尾の稚ガニが得られ、総生産尾数は32,073尾に達した。

【今後の取り組み】

稚ガニを安定して量産出来るようになったことで、資源管理で必要とされる稚ガニの飼育試験に取り組むことが出来るようになった。今後は稚ガニの長期飼育から成長や成熟といった生物学的な特性を解明するとともに、標識した稚ガニを放流して未解明な天然での移動分散などの初期の生態を解明していきたいと考えている。

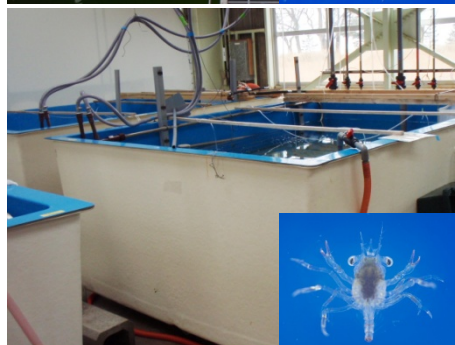
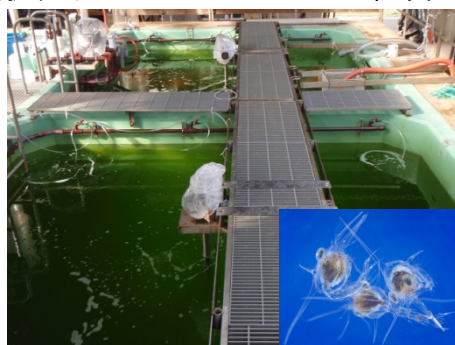


写真 ゾエア幼生(上)とメガロパ幼生(中)の飼育の様子、および量産した稚ガニ(下)